# **はじめに**

　本書を手に取ってくださってありがとうございます。

　多くの人が、「今知らないこと」を「知る」ということに喜びや楽しさを感じるのではないかと思います。

　私ももちろんそうです。

　その上、私は知らないことすべてに興味が湧いてしまうので、研究者とは対照的な、ある意味で、雑種的な存在とも言えます（笑）

　歴史や最新科学はもちろん、スピリチュアル等の神秘学系も好きです。

　完全に雑種ですね（笑）

　そして、新たな事実を知ったら、伝えることも大事だと思っているので、情報を共有することがあります。

　そんな中で、知ったことや分かったこと、気付いたことを話すと、「そうだったのか」「勉強になった」という好意的な反応が返ってくることが多いのです。

　そんなに特別な情報ではないと思うのは、自分が知っているからであって、知らない人にとって、その情報には価値があり、自分が誰かに貢献することができるのだということに気付きます。

　知ることができて良かったと言われる情報の中でも、特に聞いた人が元気になるジャンルがありました。

　日本の歴史の話です。

　もちろん自虐史観のような押しつけられた歴史ではなく、近年の研究で明らかになったことや、日本の素晴らしさが分かる話です。

　そんな話をすると、聞いている人の表情が明るくなるのを感じたのです。

　でもよく考えれば、それはそうだとも思うのです。

　学校でも自分の国に誇りをもてるような教育はなされません。

　もちろんそういう意識の高い教育をしている先生もいることは知っていますし、私自身も教員時代は、（専門は数学でしたが）、正しい歴史観をもった日本人を育てたいという思いがあり、さまざまな機会にいろいろな話を生徒に伝えていました。

　ですが全体的に見ると、そういう流れにはまだまだほど遠く、歴史の教科書に至っては、内容が日本人向けなのかどうか、何を目的としているのかも分からないものが多く採用されている現状です。

　さらに、日本人のための教科書として編集されたものは、右寄りのレッテルを貼られて、なかなか採用されません。

　そもそも、近隣諸国条項などという愚かなものを作った時点でそうなります。

　あの愚策にはしる大元になった記事がフェイクニュースだったということも、その後明らかになりましたが、近隣諸国条項は残りました。

　こんな現状では、正しく歴史を知ろうと思えば、自分で調べる他ないのです。

　幸いなことに、現代は情報社会ですから、一昔前なら知ることの難しかった情報も得ることができます。ただし、自ら動くことが前提なので、他に時間をとられて、なかなか難しい面もあるかもしれません。

　ですが、きちんと日本人としての歴史を知るべきなのは間違いないのです。

　自らの国の素晴らしさを知り、誇りがもてるからこそ、自分たちの世代が受け継いだものを、次の世代にしっかりと引き継ごうとする意識が芽生えると思うのです。

　そうして、歴史はまた紡がれるのです。

　そうして日本が存続するのです。

　私は研究者ではないので、この本も研究書ではありません。

　私が調べて集めた内容をもとに、私なりの考えを添えたものになりますので、そういった捉え方でお読みください。

# 

目次

[**はじめに**](#_Toc194771128)

[**一章 眠らされた意識**](#_Toc194771129)

[**自国史のない国**](#_Toc194771130)

[**国としての土台**](#_Toc194771131)

[**隠された歴史**](#_Toc194771132)

[**消された情報**](#_Toc194771133)

[**焚書された書籍**](#_Toc194771134)

[**計画的破壊活動**](#_Toc194771135)

[**奪われそうになった日本語**](#_Toc194771136)

[**神話を奪われない仕組み**](#_Toc194771137)

[**神話と神社**](#_Toc194771138)

[**神社という仕掛け**](#_Toc194771139)

[**二章 歴史を見て自分を知る**](#_Toc194771140)

[**縄文以前の時代**](#_Toc194771141)

[**文明はどこから文明なのか**](#_Toc194771142)

[**世界最古**](#_Toc194771143)

[**明らかになる縄文**](#_Toc194771144)

[**余裕が生む文化と技術**](#_Toc194771145)

[**翡翠の加工技術**](#_Toc194771146)

[**縄文人の生き方**](#_Toc194771147)

[**神代文字**](#_Toc194771148)

[**天皇陛下という存在**](#_Toc194771149)

[**アイ・アム・ジャパン**](#_Toc194771150)

[**マッカーサーの驚き**](#_Toc194771151)

[**受け継がれる意思**](#_Toc194771152)

[**伝統の重み**](#_Toc194771153)

[**天皇陛下の奇跡**](#_Toc194771154)

[**三章 歴史から学ぶことの重要性**](#_Toc194771155)

[**歴史から学んだ偉人**](#_Toc194771156)

[**歴史から学ばない悲劇**](#_Toc194771157)

[**四章 世界を広げるために**](#_Toc194771158)

[**日本文明**](#_Toc194771159)

[**日本の特殊性**](#_Toc194771160)

[**根底にある性質**](#_Toc194771161)

[**二元論の世界観**](#_Toc194771162)

[**大切にしたいもの**](#_Toc194771163)

[**輝く未来を創るために**](#_Toc194771164)

[**おわりに**](#_Toc194771165)

# **一章 眠らされた意識**

## **自国史のない国**

　日本には歴史教育がないと言われることがあります。

　それに対しては、小学校六年生であったり、中学校であったり、当然歴史は習っていると思う方がほとんどだと思います。

　確かにそういう形では、歴史を習います。ですが、ほとんどの教科書は本当につまらないですし、偏った歴史観を植え付けられます。

　言ってしまえば、新大陸発見という言葉に表れているように、世界史は白人目線の歴史ですし、それ以前に、中学校で習う四大文明などという定義については、日本の教科書にしか存在しないらしいのです。

　さらに、本来学ぶべき自国の歴史については、日本では教科として存在しません。

　社会科の中の一分野として、「日本史」というものが高校でありますが、全員が学ぶものでもないですし、日本人に相応しい教科書を使用しているかというと、そうとも限りません。

　他の国では当然自国史にあたる教科があります。

　一つの教科として存在するのです。

　これはまったく驚くことではなく、自分の国の成り立ちや歩みを知るのは国民として必要なことですし、国民としての誇りを育てるのは当然のことです。この事実に右も左もありません。

　それが日本では、第二次世界大戦後に消されたまま、その後もなぜか復活しません。

　日本という国は、調べるほどにすごい国だということが分かるのですが、その事実を多くの日本人が知らされていません。むしろ隠されています。

　こういった意味で、日本には歴史教育がないと言われるのです。

　自分の国に誇りをもてるような、すばらしい内容については、歴史に限らず、今でも教えられることがありません。隠されているように思います。

　いったい誰に都合が悪いのでしょうか。

## **国としての土台**

　そもそも論として重要な確認なのですが、

**自国の歴史を知り**

**自国に誇りをもち**

**自国を愛する**

ということは、国民として当たり前のことです。

　偏った思想ではなく、パトリオティズム（祖国愛）です。

　これはまったく右寄りな意見などではなく、国の土台となるものと言えます。ですが、現在の日本では他の国での当たり前も、まったく当たり前ではありません。

　日本を称賛することは悪であるかのように騒ぎ立てる人すらいます。左と言われる人達ですかね。

　国旗をかかげるのも大切にするのも、国民として当たり前ですし、国歌を歌うのも当たり前のことです。

　将来の国民を育てる立場の教師が、国旗掲揚に反対したり、国歌の際に起立すらしなかったりという事例がありましたが、そんな方は、そもそも教職に就く資格がないのです。

　なぜなら、日本国に相応しい日本人を育てることが教育の役割であり、反国家主義は、将来の国民を育てることとは真逆だからです。

　国歌が流れるときには、胸に手を当て、国旗に向かって敬意を表すという外国の光景を、テレビなどで見たことがあるのではないでしょうか。

　あれを見て、「こんなことするんだ？へぇ」と、まるでおかしい事であるように感じてしまうことこそが、実はおかしい事なのです。

　繰り返しますが、これはまったく右寄りの話でもなんでもなく、単なる国として、国民として、当たり前の土台になるものです。

　ところが、こんなことを言うと、右翼扱いされてしまうわけです。

　世の中全体が左寄りだから、真ん中すらも右扱いです。つまり、まともな人は右寄りと言われます。右は強調されるのに、左がどうこう言われる番組は見ません。報道の中立性など現実には守られていません。

　話を戻しますと、日本は、国として、国民として、当たり前の意識を、根底からゆがめられてしまっていると感じます。

　言い方を変えれば、国としての土台を崩されてしまったのです。

## **隠された歴史**

　縄文時代については、日本よりも、むしろ海外のほうが、その水準の高さを知っているという、おかしな状況になっているのが現状です。

　日本ではあまり知られていません。

　遺跡の発掘などがニュースになっても、さらっとした感じです。本来世界的なニュースであるような、世界最古となるような発見について、あまり大きなニュースとして扱われていた記憶がありません。

　芸能人のニュースの方が大きな扱いです。

　縄文時代についての話というのは、自国の成り立ちに関わる話だというのに、日本では教育の土台となるはずの義務教育でも、大したことを習いません。

　もちろん、最近になってからの発掘調査によって、新たに分かったことなども多いため、年代によっては、自身が学校に通っていた当時、知り得ない情報もあったことは間違いありません。

　近年さまざまなことが明らかになって、縄文について調べたり、発信したりする方が増えていますし、縄文に注目する方が多くなっています。

　そんな今日でも、そういった新たな発見があったことを知らずに、縄文時代は、原始的な大したことのない時代だったと思っている日本人も、まだたくさんいるようです。

　義務教育は、国民としての知識や基礎作りのために、最も大事な教育であるはずですが、教科書では縄文について、本当にささいな扱いしかない上に、情報も古く、下手をすると教師自身が縄文についてよく知らないということすら珍しくないのです。

　このような環境であるため、日本では、正しく歴史を知ろうと思ったら、自分で情報を集めて調べるしかないのです。

　そして、そうしないと、日本人としてのアイデンティティーもなく、自国の知識もないという残念な状況に取り残されてしまいます。

　よく、日本人は外国で自国について語れず、軽く見られるというような話があります。自国について誇りをもって語れることは、世界中で当然のことなのですが、日本人はその意識が薄れていたり、なかったりします。むしろ自国に対して劣等感をもつ人すらいるわけです。

　とは言え、もともとそういう日本人を作ることがねらいで、歴史を隠し、捏造し、嘘だらけの情報をあふれさせたわけですから、そういう意味では、彼らの計画通りにうまく進んでしまっているのです。

　しかもそれを後押ししているのが、反日の日本人なのですから、始末が悪いわけです。

　ただ、このことを逆に考えれば、それほど自国の歴史を知るということは、日本人として重要で強力だと言えるのです。

　意味のないことなら、歴史を隠されるなんてことはありません。

## **消された情報**

### **焚書された書籍**

　戦後、ＧＨＱは、日本人が自分たちの価値の高さに目覚めてしまうような、自国に誇りをもてるような内容が書かれている書籍を、すべて回収してアメリカに送りました。

　このやり方が実に巧妙だったと言われます。

　表立って行ってしまうと、日本人の反感を買う恐れがあるため、個人の家から無理やり回収するというような、乱暴なことはしませんでした。

　まずは書店などから秘密裏に、対象となる書籍を回収していきました。

　そして、戦後は皆貧しい中ですので、個人が古書店に売ってお金を得ることも当然珍しくないわけです。

　そのようにして売られた書籍があれば、それをさらに、古書店から回収するという徹底的に目立たない、そして効果的なやり方だったそうです。

　ですからほとんどの人が、そんなことをされているとは気付きませんでした。

　ちなみに危険視される本の選定には、国立大学の教授などが関わっていたようです。

　調べればすぐに名前も分かるので、興味があれば調べてみてもいいかと思います。でもがっかりします。

　現在では、その焚書図書の一部が発見されて、復刻されているものもありますが、読んでみると、別に危険思想という内容でもないのです。

　要するにアメリカに都合の悪い内容が少しでもある書籍と、日本人の目覚めや気付きにつながるような内容の書籍だったということなのです。

　これらについては、西尾幹二先生の『ＧＨＱ焚書図書開封』シリーズに詳しく、内容は本当に感動します。

　通常日本で生活していて、自動的に入ってくる情報とはまったく異なる姿が、戦前にも戦時中にも見られるのです。

### **計画的破壊活動**

　とにかく、そういった計画的に進められた策略によって、いつの間にか日本人から日本の正しい歴史観が奪われ、失われていったのです。

　占領時のテレビや新聞は、ＧＨＱの指示で、戦争を始めたのは日本であり、とにかく日本が悪であったという内容ばかりが取り上げられ、罪悪感を植え付けられました。

　いわゆるＷＧＩＰ（ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム）です。

　その他、日本と日本人を壊すためにさまざまな取り組みがなされました。

　戦争の名前すら大東亜戦争から太平洋戦争と変えられたくらいですから、細かいところまで徹底していたことが分かります。

　日本を都合のいいように作り変える施策の最たるものが日本国憲法だと言えます。

　たった六日でできたと言われるマッカーサー草案の翻訳憲法です。

　もちろん内容に唖然とし、抵抗した人達がいましたが、マッカーサーはその抵抗に対して、天皇陛下を人質にとって脅しをかけるようなことを言い、無理やり飲ませたのです。

　しかし、百歩譲って、占領時は受け入れることも仕方ない状況だったとしても、占領が終わったタイミングで、しっかりと憲法を見直すべきでした。

　ですが当時の首相であった吉田茂自体が、マッカーサー信望者だったので、大事に大事に守られて八十年変えられずに現在も問題を抱えています。

### **奪われそうになった日本語**

　日本からは漢字がなくなる恐れがあったことをご存知でしょうか。

　漢字どころか、すべてローマ字にされてしまうところだったとも言います。

　言語を奪われた国は滅びるという話もあるので、相当やる気満々だったのだということが分かります。

　さらに、日本人であり、初代文部大臣である森有礼などは、日本語をやめて英語にしようとすらするという考えられない愚策を進めようとしていたと言います。

　いつの時代も、大事なことなど理解していない、勉強はできても頭の悪いインテリが、とんでもないことを言い出すのです。

　ちなみに私の定義する頭がいいとは、判断力があるということです。

　ではなぜ文字を奪われずに済んだのかというと、廃止の根拠とするために識字の調査をしたところ、日本人の識字率が以上に高く、文字に何一つ不自由していないというデータが出てしまったのです。

　ＧＨＱはその不都合なデータを改ざんしようとすらしたほどです。

　こうして日本人は、自らの教育水準の高さによって、自らの言語を守ったのです。

　ただ、一方で、もともとの漢字は整理され、現在の常用漢字という枠に押し込められました。

　知る人に言わせると、そもそも漢字は、その字の作りにも意味があり、重要な要素であったものを、簡易化してしまったために、本来の意味が分からないようにされてしまったということです。

　現在、本来の漢字を使用している国は、台湾だけになっているということです。

## **神話を奪われない仕組み**

### **神話と神社**

　こんな言葉を耳にしたことはないでしょうか。

「十二、十三才くらいまでに民族の神話を学ばなかった民族は、例外なく滅んでいる」

　諸説ありますが、これは、二十世紀を代表する歴史学者であるアーノルド・Ｊ・トインビーの言葉であると言われています。

　神話を失って、百年で滅びるとも言われていますが、数えてみれば、もう戦後八十年にもなります。

　当然ですが、百年たったある日、何の前触れもなく、ぱたっと滅びるということはないでしょうから、百年まで残り少ない現在は、もはや相当大変なことになっていないといけないわけです。

　もちろん、日本として、現在があまりいい状況とも思えません。だからといって、さすがに滅びるまで行くとも思えないのです。

　では、神話が教育で扱われなくなった日本は、なぜまだ日本のままなのかということを考えた時、私はその理由が神社という存在によるものではないかと個人的に思うのです。

　日本人は自分が無宗教だという意識の人が多いという特殊な国民性です。

　しかし外国から見れば、何かにつけて神社に行くし、それは宗教ではないのかと思うでしょう。

　それでも日本人は、宗教を意識せずに、神社に行くわけです。

　初詣などは最たるもので、それこそ初詣くらいしか神社に行かない人もいるかもしれませんが、神社に行くのです。

### **神社という仕掛け**

　ここで、神社という場所について改めて考えてみると、神道の宗教施設ということになるのですが、それは同時に、神話と密接に繋がっている場所だということになるわけです。

　何が言いたいかというと、意識しようがしていなかろうが、神社に行くことによって、日本神話に触れていると言えるということです。

　これが何を意味するのかということですが、日本には施設としての神話が至る所に存在しているということであり、つまり日本人は神話を失わなかったということになってくるわけです。

　ＧＨＱ視点で考えれば、神話を奪いきれなかったとも言えます。

　この無意識レベルで神話に触れることができる、国全体に及ぶ仕組みが作られていて、しかもそれが長い年月受け継がれてきたという事実には、ただただ感動を覚えるのです。

　さらに言うと、二千年もの間の歴史を、口伝などの形で現代にまで受け継いでいる一族の方も大勢いらっしゃって、その情報開示がここ数年で加速して来ています。

　歴史好きとして、その情報は本当に光輝く宝物のようにありがたく、嬉しいものであり、さらに、この時代まで失われずに守り通してこられたことに、感謝という言葉では前々足りない思いを抱きます。

　そういった、いくつもの仕掛けや、崇高な使命感によって、日本は神話を守り通すことができたのだと私は思うのです。

# **二章 歴史を見て自分を知る**

## **縄文以前の時代**

### **文明はどこから文明なのか**

　文明の定義というものもありますが、その定義が妥当かどうかも含めて、どこからが文明なのかという議論はさまざまあるようです。

　そういった専門的な分野に切り込むだけの知識は私にはありませんが、日本人史観の歴史教科書なども手がけている竹田恒泰さんは、人間としての技術が生まれたら、それは文明ではないかというお話をされていました。

　その考えで言うと、日本には三万八千年前に文明があったということになります。

　どういうことかと言うと、世界最古の磨製石器が日本の岩宿遺跡で発見されているのです。

　猿でも偶発的に作ることが可能である打製石器ではなく、磨製石器なのです。ですから、作成するには研ぐという作業が確実に伴いますし、それは意図的な作業ということになります。

　竹田さんは、磨製石器が発見された場所にちなんで、それを岩宿文明と言えるのではないかと語っていました。

　このあたりの文化か文明かについての専門的な話は、私にはできませんが、少なくとも、世界最古が日本にあるということは押さえておくべきことだろうと思います。

　大陸から技術が伝わったのではなく、日本列島で独自に技術が生まれたから世界最古なのです。独自に発展したということがここから分かるのです。

### **世界最古**

　ここで、縄文以前と縄文時代を含めて、日本が世界最古であるものについて挙げてみます。

**・神津島の黒曜石（約三万八千年前）**

**※人類史上最古の往復航海の痕跡**

**・世界最古の磨製石器**（約三万八千年前）

**※大陸より2万年ほど早い**

**・土器**（約一万六千年前）

**・石のやじり**（約一万六千年前）

**・調理の痕跡**（約一万六千年前）

**・漆を使用する技術の確立**（約九千年前）

**※漆の木の栽培が不可欠**

　磨製石器などを見ると、先ほども触れたように、一方的に大陸から技術や文化が伝わったわけではないことが分かります。

　ともすると、文化や文明はすべて、日本よりも進んでいる大陸から伝わってきた、という認識が当たり前のようにされていますが、どうもそうでもないということが分かるわけです。

## **明らかになる縄文**

### **余裕が生む文化と技術**

　縄文時代については前著『明るい未来は和の心から』でも触れていますが、調べれば調べるほど、学校で教わるようなレベルではなく、もっと遙かに高い水準で生活していたということが、明らかになっている事実を知ることができます。

　食生活も、現代よりも多くの種類のものを食べていたと言われるほど、豊富な食材を摂取していたことが分かっていますし、だからといって、一日中野山を駆けまわっていたということではなく、時間にも余裕がある暮らしをしていたようです。

　そのことについては、火焔型土器や勾玉を見れば、納得してしまうのです。

　なぜならば、生活に余裕がない中では、その日その日の生活をすることに精一杯になるため、生活に必須でないもの、実用的でないものに関しては、作ることを思い付きもしないだろうと予想できるからです。

　ちなみに、YouTubeに週末縄文人というチャンネルの動画があるのですが、縄文時代と同じ道具を使用して、ものを作るのは、本当に時間と根気がいるのだなと分かります。

### **翡翠の加工技術**

　翡翠の勾玉を、写真等で見たことがある方も多いと思いますが、見た目の美しさの裏で、その加工は大変な作業で、当時は時間も手間も相当かかったはずです。

　なぜならば、翡翠はとても硬く、なんと宝石の中で最も割れにくいらしいのです。

　現代で作ろうと思えば、さまざまな工具を使用することになるのでしょうが、当然ながら、縄文時代には、そんな道具などないわけです。特に穴を開ける作業は相当大変な作業です。

　調べて知れば知るほど、翡翠の加工を手作業で行うのは、それこそ気の遠くなるような作業だと感じるのですが、それが遺されているということは、当たり前の結論ですが、その加工を縄文時代に実際に行っていたということになります。

### **縄文人の生き方**

　各地から見つかっている黒曜石の産地を調べた結果があります。

　黒曜石の成分を調べた結果から、その産地が海を隔てた神津島のものであるという事実が判明しています。このことから、縄文時代に海を渡る技術があったことや、各地との交流や流通があったことも分かります。

　流通といえば、先ほどの翡翠についても、糸魚川の翡翠が全国に広がっていたということが分かっています。

　主なものを挙げると

**・黒曜石**（神津島）

**・糸魚川の翡翠**（新潟）

**・琥珀**（岩手）

**・アスファルト**（秋田）

などです。

　流通があったことに加えて、縄文時代について、よく言われる特徴である、大きな争いのない一万六千年だったということをあわせて考えると、縄文時代の人々の生き方というのは、奪い合いではなく、分かち合いだったということが想像されるのです。

　また、大規模な墓地があるものの、そこには副葬品等がないことから、一般のお墓であると考えられ、さらに身分社会ではなかったことがうかがえるのです。

　そういった、支配階級のない、争いの必要のない生活をしていた時代だからこそ、心の余裕が生まれ、さまざまな文化が発展したと思われるのです。

## **神代文字**

　日本には元々文字が使われておらず、漢字が入ってきて初めて文字を使用するようになったというのが定説となっています。

　ですが、多くの人がこれに疑問をもっています。

　私もまた、漢字以前に文字がなかったということについては、相当疑わしいと感じています。

　公式に認められていませんが、神代文字で残された古史古伝も存在していたり、ペトログリフのような形で文字が刻まれていたり、外国で見つかって謎の古代文字とされるものを、神代文字で読んでみたところ意味がつながったという話もあります。

　後世の創作であり、偽書であると一蹴されていますが、本当でしょうか。

　ホツマツタヱなどが話題に上がりますが、あれはすべて創作ということになるのでしょうか。それにしては記紀のすき間を埋めるような内容が書かれていることが謎ですし、創作と切り捨てるには内容がかなり濃いものになっています。

　神代文字の存在を、嘘だと単純に片付けるには、あまりにもさまざまな事実が発見されており、これを頑なに否定する意味がまったく分かりません。

　偏った見方かも知れませんが、日本に独自の文字があったという事実を知られることが、不都合な人たちがいたのではないかとも勘ぐってしまいます。

　そう思う理由として挙げるとすれば、日本の石に刻まれた文字がシュメールと酷似していたり、その巨石による建造物が海外から注目されたりするほど貴重な物であるにも関わらず、いわゆるペトログリフ研究が公になされていないことも、実におかしなことに感じます。

　日本にあるペトログリフの数は世界でもトップクラスで、その歴史の古さもトップクラスだということなのです。それなのにこの分野での研究では後進国です。なにしろこの研究には研究費が出ないらしいので、自費で行う必要があるということです。

　ですから現在研究されている方には本当に敬意を表するものです。

　では、なぜそんな、研究の邪魔になることをする必要があるというのでしょうか。

　実際にこの研究が大々的になされた場合、歴史は書き換えられるとも言われます。

　要するに、定説が覆る可能性があるわけです。

　定説というのは、日本には漢字以前に文字がなかったというものです。

　これまで定説を唱えてきた人にしてみれば、すべてがひっくり返ってしまうので、いろいろ不都合が生じるのでしょう。

　この事実が、そういうつまらない、人間の自分勝手なことが理由なのだとすれば、心の底から失望を感じてしまいます。

　とは言え、神代文字について、素人の私が、あったとか、なかったとかと結論を言うことはできませんので、今後も情報を集めていきたいところですが、その上で個人としては、なかったと決めつけるには無理があると感じています。

## **天皇陛下という存在**

### **アイ・アム・ジャパン**

　さて、他の国には存在しない、日本独自の特徴が、皇室であり、天皇陛下という存在です。

　そもそもですが、ここまで長い歴史をもつ国は日本の他にありません。

　ところが、その事実すら知らない人は知らないのが現状です。知らされないのです。

　さらに、皇室を辿ると、その起源は神話にまで遡り、結局のところ、始まりが誰にも分からない

という、とんでもない話になるのです。

　それは世界中から尊敬を受けるのも納得です。（一部地域を除く）

　しかも、その系譜はすべて男系で継承されているということが、これがまた、ものすごいことであり、これこそが日本のアイデンティティーそのものだと言えるのです。

　なにしろ他の国が真似をしようにも、歴史が長すぎて真似ができないのです。

　ところが、これをよく理解していないのか、女系容認などの議論が出ていることが、信じられません。

　伝統として続いてきたものをここで終わらせようとしているようにしか思えません。

　さらに、女系天皇と女性天皇の区別がついていない状態で、物知り顔でこの話題を出す人に関しては、その神経が私にはまったく理解できないのです。

　ちなみに、皇室が女性差別だという話がありますが、これもまったく分かっていない意見で、皇室以外の女性が皇室に入ることはできますが、男性は入れません。

　天皇家の血筋でなければ天皇になることはできません。

　これをもって、男性差別だなどと騒いでいる話は聞いたことがありません。

　不思議です。

　とにかく、日本という国は、どう否定しようもなく、天皇陛下という存在があることで日本なのです。

　ですから、天皇陛下だけは　Ｉ ａｍ ＪＡＰＡＮ　と名乗れる存在だと言えるでしょう。

### **マッカーサーの驚き**

　戦争に負けて、昭和天皇はマッカーサーと会談をすることになりました。

　マッカーサーは敗軍の将がどれだけ哀れな命乞いをするのかと思っていたようですが、昭和天皇はマッカーサーの知る敗軍の将とは異なっていました。

　まず、全責任についてご自身にあるとおっしゃった後、自分の命よりも国民の平穏を保証してくれるよう、マッカーサーに訴えたのです。

　古今東西、負けた後に、そのトップがまずすることは、自分がいかに生かしてもらうかということで、マッカーサーはそれを期待していたのですが、そうはならなかったのです。

　一説にはこの会談によって、マッカーサーは昭和天皇の言葉に感動し、敬意を抱いたとも言われますが、本当のところはマッカーサーにしか分かりません。

　その後、国民の苦しみに対して自分ができることをしたい、国民を励ましたいとお考えになった昭和天皇は、全国巡幸の許可をＧＨＱに求めます。

　その時に宮内庁に伝えたとされるお言葉があります。（旧かなづかい）

**この戦争により先祖からの領土を失ひ、国民の多くの生命を失ひ、たいへん災厄を受けた。**

**この際、わたくしとしては、どうすればよいのかと考へ、また退位を考えた。**

**しかし、よくよく考へた末、全国を隈なく歩いて、国民を慰め、励まし、また復興のために立ち上がらせる為の勇気を与えることが自分の責任と思ふ。**

**このことをどうしても早い時期に行ひたいと思ふ。ついては、宮内官たちは私の健康を心配するだらうが、自分はどんなになってもやりぬくつもりであるから、健康とか何とかはまったく考へることなくやってほしい。宮内官は、その志を達するやう全力を挙げて計画し実行してほしい。**

　よく言われる、利他の精神とは何かが理解できる思いです。

　ＧＨＱは、はじめは何か企みがあると疑ったようですが、結局は簡単に許可を出します。

　なぜなら、戦争に負けた国民は、最高責任者である昭和天皇を恨み、罵詈雑言はもちろん、石を投げるなど、散々な目に遭わせるに違いないと思っていたからです。

　愚かな行為だと小馬鹿にしていたようでした。

　ですが実際には、全国で歓迎されるのです。

　国民は涙を流して「天皇陛下万歳！」と叫ぶのです。

　この光景を見て、ＧＨＱは恐れを抱きました。日本国民がまた一致団結して刃向かってきたら一大事だと思ったのでしょう。

　ＧＨＱは、禁止されていた日の丸を小学生が掲げたという理由で、巡幸を禁止します。それぐらいしか理由が作れなかったのでしょう。

　巡幸の間、どれだけ熱かろうとも、昭和天皇はしっかりとした身だしなみで臨んだそうです。熱気の漂う鉱山の中ですら、身だしなみを整えたままお声掛けをされたということです。

　また、民を気遣うお言葉には皆が涙したと言います。

　その意思と行動には感動しかありません。

　それは全国で万歳が起こるのも無理のない話です。

### **受け継がれる意思**

　平成の世に東日本大震災がありました。

　天皇皇后両陛下は東京武道館に行き、福島からの被災者をお見舞いしたそうです。

　石原慎太郎都知事は、天皇陛下が翌年に心臓手術をすることを知っていたため、健康を心配して、「被災地は皇太子、秋篠宮両殿下を名代に差し向けてはいかがでしょう」ということを進言したそうです。

　陛下は黙ってそれを聞いていたそうです。

　ですが、武道館を出る時です。石原都知事にこのようにおっしゃったそうです。

**「東北は、私が自分で行きます」**

　その後、両陛下は東北へ行きました。お膝が悪かったということですが、そんなそぶりも見せずに、冷たい床に膝をついて、同じ目線で優しくお話される姿は、メディアでも報道されました。

　私は当時、東京武道館でのエピソードを知りませんでしたが、これを知った時は涙が出ました。

　昭和天皇のあり方や思いは、しっかりと受け継がれていたことが分かるのです。

### **伝統の重み**

　現在は、皇統断絶の危機であると言われます。

　そして、実際問題として、男系を継続するのは現実的ではないという意見の人もいます。

　意見として、それは理解できます。

　ですが、そもそもとして、戦後にさまざまな、日本に都合の悪いルールを設定され、それをここまで放って置いたことが問題であって、そんなものは、日本として必要なルールにすればいいと、素人考えでは思うわけです。

　過去にも系統断絶の危機があったことが記録にあります。その際には、血筋をさかのぼって天皇家の男系子孫を探しました。継体天皇です。

　そういうことができるようにしてはいけない理由は何なのでしょう。

　これは大前提だと思うのですが、憲法や法律は国あってのものです。

　つまり、国が存続していることが前提条件です。

　そして日本という国は、天皇陛下が前提条件の国です。

　この優先順位を取り違えると、それこそ孫子の代の不利益になります。

　それどころか日本が日本ではなくなります。

　そのあり方は歴史と共に受け継がれてきた伝統であり、安易にどうこうして良いようなものではないレベルのものです。

　そして、一度失われてしまったら二度と戻らない類いのものです。

　このあたりの話は、いつも爽快な本を出されている倉山満先生が『皇室の掟』という本を新たに出されたので、これから詳しく勉強したいという方にお薦めですね。

### **天皇陛下の奇跡**

　見えないものを信じないとか、奇跡など偶然と片付けてしまう方には、この後の話は、それこそ「到底受け入れられない」話だと思いますので、飛ばしていただいて問題ありません。

　ですが、偶然で片付けるには、あまりにも不自然なことが実際に起こっていることは確かなのです。

　まずは硫黄島です。

　硫黄島での戦闘については、それだけで一冊の本になる内容です。

　栗林中将を筆頭に、過酷な環境で、日本を守るために戦い抜いた方々への感謝は、決して忘れてはならないものです。

　そんな激戦があった硫黄島には、自衛隊の基地がありますが、そこに行った自衛官や海上保安庁員は皆、心霊現象に悩まされていたと言います。

　それは平成の時代にも続いていました。

　平成六年に、当時の天皇皇后両陛下が、硫黄島を訪問して拝礼されました。

　すると不思議なことに、その後ピタリと心霊現象は起きなくなったと言います。

　その際に両陛下がお詠みになったのは、栗林中将の辞世を意識されたものだったと言われます。

　そこまでのお気持ちがあったからこそ、戦死した方々の霊も癒され、鎮まったのでしょう。

　また別の話になります。

　昭和天皇は、巡幸の際に傘を必要としなかったということです。

　行事の際にはいつも晴れるため、晴れ男だと言われました。

　これは天皇晴れと呼ばれたそうです。

　この現象は次の平成でも見られ、最近で特に注目されたのは、令和の即位の儀でした。

　その日東京は雨で、進行にも影響が出る状況でしたが、即位礼正殿の儀が近付くにつれて雨が収まり、晴れ間が見えるという現象が起こりました。

　天皇晴れは、英訳されてエンペラーウェザーと言われるようになり、世界中を感動させたということです。

　もちろん単なる偶然と片付けることもできるのでしょうが、偶然が続くこと自体が奇跡と呼べるのではないでしょうか。

　これらがもし、男系の継承によって維持されて伝わってきた特殊な能力だとすると、男系を絶つことで失われてしまうということになります。

# **三章 歴史から学ぶことの重要性**

## **歴史から学んだ偉人**

　歴史から学んで活用した通快な例として挙げるならば、日本海海戦において参謀として活躍した秋山真之でしょうか。

　司馬遼太郎の『坂の上の雲』でご存知の方が多いかと思います。

　日本海海戦では、世界中の海軍から尊敬を集めた東郷平八郎率いる連合艦隊が、世界最強とも言われたロシアのバルティック艦隊に対し、壊滅的打撃を与えました。

　この時に有名なのが、東郷ターンと丁字戦法です。ですが、詳しく調べてみると、実際に丁字戦法が使われたか否かには諸説あるそうです。戦闘内容が丁字になっているとも言われますし、そもそも東郷ターンの時点で丁字を捨てていたとも言われます。

　本書ではこのあたりは特に深掘りしません。興味があれば調べてみるのも面白いと思います。

　参謀の秋山真之はこの日本海海戦で、七段階までの作戦を立てていたとされています。中でも有名な丁字戦法は、どのようにして考案されたのでしょうか。

　その答えは水軍古書なのだと言います。日露戦争当時としても大昔の、水軍についての研究をして、作戦を考えついたということなのです。

　時代も戦力も違うため、武器の種類も船の大きさもまったく違うわけですが、そこから学び、時代に合わせて作戦を考えたのです。

　歴史に学んで、歴史を生かし、歴史に名を残した人物です。

## **歴史から学ばない悲劇**

　歴史から学ばないことで起こる悲劇があります。

　例えば、先ほどの秋山真之が活躍した日露戦争では、日本は情報を大事にしていました。

　バルティック艦隊の移動状況についても、イギリスの協力で現在地を把握していたと言います。

　日露戦争の終わりに、ロシア国内が荒れて、革命が起こり、戦争の継続が困難になったことが、講和に至る理由として大きいわけですが、その革命は、明石元二郎が諜報活動を行い、工作していたことが大きな要因であることが有名です。

　遡って歴史を見ると、織田信長も、桶狭間の戦いにおいては、今川軍の情報をリアルタイムで収集しながらタイミングを待っていました。また、その情報提供者への報奨を手厚く行ったということですので、情報の重要性をしっかりと理解していたことが分かるのです。

　ところが、時代が進むにつれて、だんだんと情報に関する意識がおろそかになっていきました。

　戦争前の時点で、日本の暗号はアメリカに解読されていましたし、そのことを指摘されて、解読された暗号を別のものに変えるために、なんと電波に乗せて連絡するという手段をとったという信じられない話があります。変更した瞬間に変更内容をわざわざ知らせているのです。

　これは作戦ではなく、それで問題ないと思ってやっているから驚きなのです。

　真珠湾攻撃もすべて筒抜けでしたし、何よりも、宣戦布告が遅れて奇襲だと騒ぐ前に、すでにその通信内容をアメリカは知っていたということですので、すべて手のひらの上で転がされていたわけです。

　とにかく情報に関して、上の意識が低かったことがよく分かります。そのせいで出た犠牲は数知れません。最も愚かだと思うのは、山本五十六の死の原因が自分達にあると自覚できていなかったらしいところです。あの時点においても、暗号は解読されていないと思っていたようです。

　思っていたのか思い込もうとしていたのかは不明です。

　少し別の話をすると、その昔、ライト兄弟よりも先に飛行技術を研究した二宮忠八という日本人がいました。まだ航空機がない時代に、上空から偵察すれば、兵士が死なずに済むと考え、研究を進めたそうです。当時は必要な大きさのエンジンがなかったため、自らエンジンを作ってしまったという話です。

　これが実現していたら、日本にとってとても大きなアドバンテージになる話です。ところが、軍はその研究の重要性を理解せず、資金を出さなかったため、世界初が持っていかれてしまいました。

　また、二次大戦中には、日本以外の国はレーダー技術を使用していたことが知られていますが、これには、日本人の宇田新太郎、八木秀次によって開発された「八木・宇田アンテナ」が使用されていました。なんと日本人の技術が使われていたのです。

　日本の上層部は、本来はいち早くレーダーを開発していなければならない立場でしたが、その重要性に気付くことができず、日本人の開発した技術を生かすことができませんでした。

　その後、他の国のレーダーを回収した際に、八木・宇田アンテナが使われていることを知り、驚愕したということです。

　これらの事から分かるのは、日本の指導者層が、先読みができず、先見の明もなかったため、下が優秀でもそれを生かすことができなかったという残念な事実です。

　では現在の日本はどうでしょう。

　あえて何も言いませんが、考えれば考えるほど、歴史は繰り返すという言葉が重くのしかかってくるように感じてしまいます。

# **四章 世界を広げるために**

## **日本文明**

### **日本の特殊性**

　日本人は、自分の世界を広げるのが得意な民族です。

　歴史を見てみるとそれがよく分かります。

　大昔ですと、漢字を取り入れた後、それを独自にカスタマイズして、ひらがなやカタカナを作りました。

　鉄砲は仕組みを解明して量産してしまいますし、かなり改良も加えて、当時は世界でもトップクラスの武器だったという話があります。

　明治維新以降は、マイナス面もあるものの、欧米の文化文明を取り込んで発展しました。短期間で見違えるような変化を遂げたことは歴史を見れば明らかです。

　あまり知られていませんが、二次大戦前の日本のロケット技術は、ドイツに次いで第二位だったということです。しかし戦後そのデータは失われました。

　現在を見てみると、ハロウィンやクリスマスなど、もともと宗教行事であるものも、賛否両論はあるでしょうが、一般行事に落とし込んでしまいました。宗教行事を意識せずに、ある種のフェスティバルとして楽しんでいることは、なかなか興味深いところです。

　カスタマイズという面では、日本の得意分野に小型化というものもあります。最近ではレールガンが話題になりました。

　もともとあるものをより精密に作り替えるアイディアと技術は、日本独自と言って良いかは賛否両論あるでしょうが、世界でもトップクラスであることは間違いないと思います。

### **根底にある性質**

　ではその特殊性の根底には何があるのかを考えると、同じ性質を神道に見ることができます。

　神道は、他の宗教の神様をも取り込んでしまいます。

　別の神様だからと否定するのではなく、認めて、受け入れて、八百万の神々に加えてしまったのです。

　このあたりが他の宗教とは決定的に異なる性質で、宗教による争いが起こりにくい理由です。

　過去に述べていますが、神道が世界平和の鍵だと私は思っています。

　もっと言えば、神道は日本人にとって、宗教ではなく習慣になってしまっていると考えています。

　ではそもそも神道はどこから来たのかというと、色濃く残るアニミズムは、縄文時代の自然崇拝に行き着くと言われます。

　縄文の生き方にその源流が存在するということになります。

　争いを生む原因は対立です。

　先ほどの宗教の話で言えば、自分たちのかかげる唯一絶対神こそが正しいのだから、それ以外は偽物であり悪であるという理論で対立します。

　現代で言えば、一つの物事に対する考え方で、どちらが正しいかという白黒をつける過程で対立します。

　基本的な考え方としては、一方が正しくて、もう一方は誤りであるというものが多いように感じます。

　ようするに二元論です。

　これによって対立が生まれてしまうのですが、縄文時代は争いがなかったということであれば、単純に考えて、それをしてこなかったということだろうと思うのです。

　ものごとを判断する基準が、単純な二元論ではなかったということです。

　これを言葉に表したのが聖徳太子の「和をもって貴しとなす」ということになります。

　話し合いで決めていきましょうという姿勢で、よく言われる、納得のいくグレーを探っていきましょうという考え方です。

　聖徳太子のこの言葉がその後の日本に重要だったと言われますが、ある意味で、聖徳太子は縄文から引き継いだ日本の思想を言語化したのであって、もともとの日本人の考え方として、根底にあったものだと私は考えています。

　ですからそもそも、日本人にはこういった二元論は合わないのです。

　そこに無理やりな形で白人社会の価値観を押しつけられたことで、窮屈な思いを抱く人が増えているのだと感じています。

### **二元論の世界観**

　二元論の人がよく使うおかしな思考を挙げると、ＡでないならＢであるという理論だと思います。

　Ａでなくても、ＢやＣやＤがあるはずですが、この二元論の世界観では、ＡとＡでないものしか存在せず、Ａでないもの＝Ｂという思考なのです。

　味方でないなら全部敵という思考です。

　例を挙げると、

　・宗教が違う＝悪魔崇拝

　・巨人ファンではない＝アンチ巨人

　・うどん屋に行かない＝うどんが嫌い

　・刺身を食べる機会が少ない＝刺身が嫌い

　・憲法九条に疑問をもつ＝戦争肯定派

　・愛国心＝軍国主義

　・憲法改正＝戦争になる

　・男女の性による区別＝差別主義

　・反主流派経済学＝国債無限発行可能論

　・税は財源ではない＝国債無限発行可能論

　挙げればいくらでも出てきそうですが、例えば、うどん屋に行かないからと言って、うどんが嫌いとは限らず、小麦粉が苦手であるとか、うどんは家で食べたいだとか、そもそも外食をしないだとか、外食する時は洋食系しか行かないとか、さまざまな可能性があるわけですが、二元論の世界観の人は、単純にＡでなければすべてＢという狭い視野でしかものを見ることができないのです。

　この考えではＣの人もＤの人もＢ扱いです。

　相手に対する過度の決めつけをするので、論点がズレてしまうため議論も成立しません。

　メディアの世界はもはやこうなっていると感じますが、私の思い込みでしょうか。

### **大切にしたいもの**

　日本人が窮屈な思いを抱いているのであれば、今の価値観は日本人に合っていないということです。

　では具体的には何を大切にしていけば良いのでしょうか。

　これは前著『明るい世界は和の心から』にも書きましたが、大切なのはまず相手の話をしっかりと聴くことです。

　当たり前の話になりますが、話し合いをするには、相手の意見を知らなければなりません。そのためには相手の話を聴かなければなりません。

　話を聴いた上で、次にすることは、相手の意見を認めることです。

　認めるということと、受け入れると言うことはイコールではありません。

　受け入れるかどうかは別にどうでも良いことです。大事なのは、意見が違うからといって、それを否定したり、敵対視したりすることではなく、一つの意見として認める姿勢です。

　認めた上で、どうすることが最良なのかを議論するのです。

　大事なのは認める姿勢であり、そこからしか先に進むことはできません。

　ですが、これは難しいことではなく、その姿勢は、先に述べたように、日本には縄文時代からあると考えられるのです。

## **輝く未来を創るために**

　現代に生きるということは、祖先から受け継いだ、歴史のバトンを渡されているということです。

　このバトンは、次の未来に引き継ぐべきものです。

　過去に滅びた文明や国家がありました。それは珍しいことではなく、世界の歴史で当たり前に起きていることです。

　そんな中で、世界最古の歴史をもつということは、世界的に見て他と比べようもない価値があります。ですが、その自覚は日本人にはあまりないのです。

　ただ、それも無理のないことで、自分自身のことは一番見えないものです。

　その国にいるからこそ、その価値が見えなくなっているのが、日本人なのかもしれません。

　ですが我々には、魂に刻まれた記憶があるはずです。それは縄文から受け継いだ日本人としてのあり方の記憶です。

　世界の価値観が変化している現在だからこそ、一人一人が、日本人としての日本観を取り戻すことが重要だと感じます。

　和の覚醒です。

　受け継がれる日本の精神こそが、我々の一番の財産だと私は思っているのです。

# **おわりに**

　最後までお読みくださりありがとうございます。

　「愚者は経験に学び　賢者は歴史に学ぶ」という言葉がありますが、歴史を知ることで、自分の一生では知り得ない知識を得ることができますし、大きな流れをつかむことで今後を予測することができることもあります。

　それ以前に、自国の歴史というのは、祖先の記憶であり、自分自身のアイデンティティーです。

　歴史を共有することで、国が国として成り立つと言っても良いのではないかと思っています。

　ただ繰り返してきた話ですが、不幸なことに、現在の日本では正しく歴史を学ぶためには、自分から情報をとりに行く必要があります。個人の行動が必要だということです。

　そのために少しでも役立つことができたらという思いで本書を書こうと考えました。

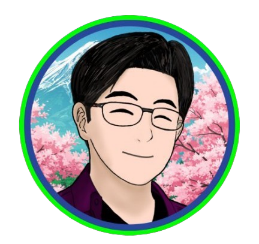
　私は日本人で良かったと思っていますし、日本が良い国だと思っています。

　ですから日本人がそのことに気付いて、覚醒することが、未来に向けて大事なことだと考えています。

　今後、そういった活動を増やしていきたいと思っていますので、同じ志の方がいらっしゃいましたら、是非お声掛けくだされば嬉しく思います。



<https://www.amazon.co.jp/dp/B0DFZP9KYB>



<https://x.com/HRT4212>

<https://lin.ee/Gvr5zIr>



<https://youtu.be/ywzYl2A3HTc>